

---

# 幻想郷征服録

桜三里

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想郷征服録

### 【Zコード】

Z2307BA

### 【作者名】

桜三里

### 【あらすじ】

博麗大結界に今日も包まれ、平和な日々を過ごす幻想郷。

しかし弱つた妖怪、幻想物を回収する役目を持つ博麗大結界が引き寄せ幻想郷へと至らせた相手は、最悪の災厄だった。

黄金の英雄王ギルガメッシュ。

外の世界と結界により隔離されたその地は、世界全てを所有するギルガメッシュにとって、所有物ではない。ならば、よからう。征服王よ、時にはこの我オレも征服と戯れようではないか。

Fate/stay night の英雄王ギルガメッシュが幻想入りという誰得な小説です。少しでも楽しんでいただければ。

## プロローグ（前書き）

東方モノを書くのは初めてです。感想などお待ちしております

## プロローグ

その男は王であり あらゆる者も あらゆる鎖も

Der Mann ist King; wie für jede Kette  
e Person wie für jede Kette

あらゆる総てを持つてしても繋ぎ止めることが出来ない

Ich kann es nicht damit binden,  
auch wenn ich es damit mache,  
jedes alles

彼は縛鎖を千切り 槌を壊し 哄笑する世界で唯一の王

Ein König nur in der Welt, von  
der er reitet, und bricht gyve  
und Lachen

この世のありとあらゆるモノ総て 彼を抑える力を持たない

Ich habe keine Macht, ihn von  
der Welt all jeden Sachen ins  
chach zu halten

ゆえ 神は問われた 貴様は何者か

Dann fragte ihn Jesus. Was ist  
Ihr Name?

愚問なり 無知蒙昧 知らぬならば答えよう

E s i s t e i n e d u m m e F r a g e . I c h a  
n t w o r t e .

我が名は ギルガメッシュ

M e i n N a m e i s t g i r u g a m e s h

## プロローグ（後書き）

元ネタは Dies irae のラインハルト・ハイドリヒの詠唱、『レギオン』です。

## Side ルーミア

人食いの少女は、眼下に広がる霧の湖を見下ろしながら、いつも通り気езнに宵闇の中を舞っていた。

この湖は、昼間になると深い霧で覆われる。そして夜になれば霧が晴れ、また朝になれば霧が発生する、という奇妙な性質を持つている。それが何故なのかは知らないし、興味もない。彼女にとってはただ夜の散策で通り過ぎるだけの場所であり、別段興味の対象にはならなかつた。

ルーミアは、この時間が好きだつた。

闇を朋友とする彼女にとって、太陽の光は大敵である。一日の活動時間を終えて西へと沈んだ太陽と共に、少女の気安い時間が訪れるのだ。わざわざ自分の周囲に闇を発生させずとも、当然のように闇に覆われた空。星々の瞬きこそ存在するものの、その程度の薄い光はルーミアにとって、闇と変わらない居心地である。

この時間は、彼女にとって何の憂いもなく、狩りができる時間だつた。闇を恐れる人間へと夜闇に乗じて襲いかかり、その身を喰らいつくすのが彼女にとって、最高の愉悦となる時間だつた。そんな風に襲つた人間の数が、もうどれほどになつたかは分からぬ。數えたこともないし、数えようとさえ思はない。例えるならば、今まで何度も食事を摂つてきたのかを問われたところで、即答できる人間などいないだろう。ルーミアにとって、人間を食つた回数というのは、それに似ていた。

だが同時に、ルーミアは知っている。この時間に、彼女の獲物が出歩きはしないことを。

人間は闇を恐れ、妖怪を恐れる。昼が人間の時間ならば、夜は妖怪の時間だ。それを知っている人間は、夜になれば人間の里で眠りに入っている。妖怪であるルーミアは、人間の里に入ることはできないのだ。領域を侵した時に、動く輩のことを考えれば、至極当然な考え方ですらある。

例えば　人里の守護者と不死鳥の少女。

例えば　博麗の巫女と黑白の魔法使い。

例えば　妖怪の賢者と九尾の狐。

人里へと侵入した時点で、これだけの大物を敵に回すこととなる。それはルーミアのみならず、妖怪にとっては忌避すべき対象だ。間違いなく、殺されるのは自分であると分かるのだから。

だからこそ、ルーミアにとつての獲物は、危険を承知で里の外を出歩く人里の人間か、もしくは、そんな常識さえ知らない外来人か、その程度に限られる。

とはいっても、人里の人間などほとんど出歩きはしないし、もし存在したとしても、大抵は彼女以外の妖怪にとつて食われる。この辺りの妖怪は、どいつもこいつも食欲旺盛だ。そんな中でルーミアが先に発見することなど、それこそ稀、というものだ。

だからこそ、ルーミアは別段、狩りの成果を期待して飛んでいたわ

けではない。どうせ獲物は見つからないのだから、夜の散歩程度の  
気安さで飛んでいただけだ。

誰か友達でも見つかれば、適当に雑談にでも興じよう。この時間な  
らば、蛍の妖怪か夜雀あたりが暇をしているかもしれない。彼らら  
の根城は、確か竹林あたりだったかな、と適当に向かう場所を決め  
ようとして。

それを。

見つけた。

霧の湖から紅魔館へ続く森。吸血鬼の住まう紅魔館の威光か、その  
森に住まう者は皆無と言つていい。ルーミアと同じ、人食いの妖怪  
でさえ住まうことは稀だ。

理由はただ一つ。

吸血鬼の根城近くを人間が通ることなど、皆無であるからだ。

だがルーミアは、見つけてしまった。目を向けてしまった。霧の湖  
と紅魔館に挟まれた森の、ほぼ中央。

闇を操る彼女にとつて、ひどく身近な存在。人が忌み、妖が好むもの。

自然、ルーミアの向かう先はそちらへと矛先を変えていた。

まるで、この世全ての悪を内包したかのような、圧倒的な闇。

彼女は、闇を好んだ。

ルーミアの全速でもって、立ち上る闇へと向かう。強大な闇。それこそ、ルーミアの操る闇などお話にもならないほど、絶対的な闇。

それならば。

喰らえ。

妖怪としての本能が、ルーミアにそう告げていた。

闇の中心へと降り立つ。木々に包まれた森の、小さく拓かれた場所。樹齢が幾らかなど見当もつかない大樹に囲まれた、小さな間隙。

そこにいたのは、男だった。

星の小さな瞬きにさえ煌めく、黄金色の髪。逆立つたそれと同じ色でありながら、それ以上に激しい輝きを持つ厳かな黄金の鎧を纏っている。少なくともこの幻想郷では、あまり見かけない格好。

鋭い眼差しが、ルーミアを見据えた。

「……消えよ

重く響く、低い声音。その言葉に込められているのは、圧倒的な威圧感。

殺氣すら込められた言葉に、ルーミアは息を呑む。

「オレ私は些か機嫌が悪い。その命を散らせたくないば、疾く消えよ

これは 王だ。

決定的に存在の次元が違う、絶対的に存在している、王だ。

そう、本能で、理解した。

「ぐくり、と唾を飲み込む。恐怖すると同時に。恐怖すると同時に。それは甘美な果実を口の前にしたような感覚でもあった。

ただそこに存在しているだけで、漏れ出る圧倒的な闇。

だからこそ、ルーミアの言葉は、発せられた。

「あなたは、食べてもいい人間?」

いつだって、獲物を口の前にすれば告げた言葉。それに対する答えが何であれ、食うことには変わりないのだけれど。通過儀礼のようなものだ。

己が人食いの妖怪であると誇示し。

相手がこれより食われる運命を暗喩する。

いつだってルーミアにとっての獲物は、この言葉と共に恐怖した。あの博麗の巫女と黑白の魔法使いを除いて、誰もが死に恐怖した。

「……むづ」

だが目の前の男は、そう静かに微笑むだけだった。

「我<sup>オレ</sup>に対するような物言いをするとは、人食いの化生は礼儀も知らぬようだな」

「れーぎ? それって美味しいの?」

「だが、己<sup>オレ</sup>が武に依ることでしか語る言葉を持たぬ者は、好みこともない」

くくく、と男が嗤う。ルーミアの頬を、一筋の汗が流れるのが分かつた。

自分では、この男には絶対に勝てない。

本能がそつ警鐘を鳴らす。逃げる。そつ理性が警告する。この場から離れる。全ての感覚が、ルーミアを追い立てる。

だけれど、知つてしまつたのだ。

この、強大すぎる闇を。

「貴様の武<sup>オレ</sup>がどれほどかは知らぬが、我が少々遊んでやるとしよう」

男が言葉と共に、立ち上がる。ゆらり、と鈍重な動き。しかし、確実に眼差しはルーミアを見据えて。

次瞬。

ルーミアは我知らず、懐からスペルカードを取り出していた。

枚数の提示、カード宣言、スペルカードルールに施されたあらゆる規律を、この場では考えない。あらゆる全ての手段を用いて、あらゆる全ての卑しさを持つて、全力で挑まなければ絶対に勝てない。彼女はそう本能で理解した。

これは『弾幕』『』などでは、決してない。

殺し合い、だ。

「夜符『ナイトバード』！」

スペルカードを叫ぶと共に、ルーミアの前方に弾幕が伸びる。翼のように左右へと弾幕を開き、逃げ場を奪うスペル。煌めく紫と青の弾幕が展開されるも、目の前の男は特にどうどいうこともなく、変わらず面倒臭そうに前髪へと手櫛を入れるだけだった。

「ふむ、さすがは童女といえ化生といったところか」

男はそう呟くと共に、右手の指を弾く。それと共に、確実に男を捉えていたはずの弾幕が。

「……え？」

捻じ曲がつた。

まるで物理法則を無視しているかのように、直線で向かっていたはずの弾丸が、男へ当たることを避けるかのように、曲がってしまった。ナイトバードにそんな効果はないし、付加した記憶もない。それなのに。

「さて、どうやら後の世では『絶対不落の砦』アスピス・ヘパイオスなどと大仰な名を付けられているらしいが、我にとつては所有物の一つでしかない神代の盾よ。神代より伝わりし盾の前で、貴様の弾丸など塵芥にも等しいぞ、雑種」

男がその右手に携えている、小さな丸盾。まるで時代に合っていない、青銅でできたような盾。神にも等しいほどの圧倒的な存在感を持つた、大盾。

それが男の周囲に不可視の結界を張り、弾幕を全て、捻じ曲げたと  
いうこと。

ルーミアは混乱した。そんな能力は、聞いたことがない。弾幕とは耐えるものでもなければ防ぐものでもなく、躰するものだ。弾くものでもなければ捻じ曲げるものでもなく、避けるものだ。

そんな常識など、一切が通じない。

「あ……あ……げ、月符『ムーンライトレイ』つ！」

ばら撒く小さな弾丸と、中央に走る光線。いくら不可視の結界といえ、威力だけならばムーンライトレイの方が高い。ルーミアはそう信じて、破壊力だけならばどのスペルにも勝る、それを放つたはずだった。

「ふむ、月光か。悪くはない。もっとも、偉大なる我にとっては月の光すら足りぬ。我を照らしたいと言つならば、太陽を持ってくるがいい」

だがそれでも、男はただ平然と、ただ超然と、そこに立っていた。  
信じられない　　その思いに、体が震える。

いつか戦った、博麗の巫女。いつか戦った、黑白の魔法使い。どちらも強かつたし、ルーミアは勝つことができなかつた。

だがルーミアは思う。確かに博麗の巫女も黑白の魔法使いも強い。だけれど。

この男ほどに、圧倒的な力があつただろうか。

「余興は仕舞いか？ では我オレも、財を幾つか見せてやる」

『じみて、右手で、指を鳴らして。

「『ゲートオブバビロン  
王の財宝』」

男の背に、数多の神剣、聖剣、神槍、聖槍、古今東西あらゆる神話に登場する、一振りだけで世界の命運を変えてしまえるほどの幻想を持った、武器が。

一斉に、その矛先をルーミアに向けた。

## Side 博麗靈夢

博麗神社の夜は早い。もつとも、それに対して確たる理由があるといつわけではない。

単純に今代の博麗の巫女、博麗靈夢の寝る時間が早い、というだけだ。幻想郷どりの人は娯楽に乏しく、頼んでもいのに勝手に持つてくる迷惑天狗の作った新聞くらいしか暇潰しの道具はない。そして靈夢は、八割方が主觀で書かれた新聞を、貴重な油を使ってランプを灯してまで読む趣味はない。

つまり、暗くなれば眠る。明るくなれば起きる。それがこの博麗神社の主、博麗靈夢の生き方だった。

そして今日も同じく、いつも通りの時間に床につき、いつも通り眠りについた、はずだったのだが。

不意に、神社の縁側の扉が開く音がした。

物盗りにしては、自分の音を隠していない。つまり、見つかってころで問題のない相手だということだ。もつとも、靈夢ならばいくら音を隠したところで、気配で察するのだから意味などないのだが。

布団に包まつたままで目を開き、考える。

第一候補、黑白の魔法使い、霧雨魔理沙。

恐らくこの神社に訪れる人間で、最も頻度が高い相手だろう。厄介なトラブルメーカーであるも、どこか憎めない彼女は、何故かよくここに入り浸る。

だがそれも、時間を考えてのことだ。わざわざ靈夢が眠りについてまで、ここに入り浸るほど魔理沙は迷惑な輩ではない。もしも魔理沙だとするなら、何かの事情を抱えていると考えた方がいいだろう。

第二候補、小さな百鬼夜行、伊吹萃香。

魔理沙と同じく、この神社に入り浸る酔いどれ幼女の鬼である。いつもふらりとどこかへ出かけていて、同じくふらりとまた戻ってきては酒を飲む、という生活だ。

考えられるトスレバ、ふらりと神社へ戻ってきたはいいものの、夜であるため家主である靈夢のことを考え、縁側にて一人手酌で月見酒でも楽しんでいる、といったところか。悪酔いすれば、靈夢が起こされて付き合わされる可能性もある。もっとも、あの鬼が悪酔いしている姿など見たことはないのだが。

第三候補、神隠しの主犯、スキマ妖怪、八雲紫。

幻想郷でも最古参の妖怪で、幻想郷を覆う博麗大結界の維持を行う大妖怪。その実力は幻想郷全ての実力者の中でも五指に入り、特に『境界を操る程度の能力』という反則じみた能力がそれを示してい

る。

まあ靈夢にとつては、ただの胡散臭い妖怪に過ぎないのだが。幻想郷の危機に異変解決へと迅速に乗り出す以外は、式神に任せきりで寝てばかりのグータラ妖怪だ。もしも今訪れた相手が紫ならば、それこそ大問題が発生しているとみていいだろう。

さて、靈夢に思い浮かぶ候補は、それくらいのものだが。

願わくば、少々微睡んでいるため、寝所に入っこない程度の用件であつてほしい。

そんな願いは、叶わなかつたけれど。

「……靈夢、起きなさい」

意外な人物の来訪などは当然なく、それは第三候補、八雲紫の声だった。

思い切り溜息を吐きたかったが、堪える。魔理沙の持つてくる厄介事程度ならば、まだ良かつた。悪酔いした萃香が無理やり酒に誘つてくる程度ならば、まだ良かつた。

この時間に、八雲紫がここを訪れる。それは、すなわち。

幻想郷の、危機を示しているのだから。

「……何よ」

起き上がる。紫はいつも通りの名前と同じリベンダーのドレスを纏い、夜だというのに日傘を片手に枕元に立っていた。体は睡眠を欲していたが、それでも紫を無視するわけにはいかない。

幻想郷の危機とすら呼べる状況に、博麗の巫女である靈夢が動かないわけにはいかないのだから。

「あんたが神社に来るなんて、珍しいわね。賽銭箱は表にあるわよ。でも参拝は、できれば昼間ににしてほしいんだけど」

「……火急の用件よ」

靈夢の軽口を受け流し、紫は重々しくそう口を開く。

その表情に浮かぶのは、痛々しいほどの絶望感。幻想郷でも圧倒的な力を持つこのスキマ妖怪の、このような姿を見たことはない。

つまりそれだけ 事態は切迫しているということだ。

「博麗大結界は、外の世界で弱つた妖怪を幻想郷に保護する、という目的もある……なんて、あなたは言わなくても知っているわよね？」

「……当たり前でしょ。今更、私に博麗大結界の講釈をしに来たわけ？」

「靈夢……どうやら今回、博麗大結界はとんでもない輩を引きつけてしまつたみたいなのよ」

とんでもない輩　その言葉に、思わず靈夢は息を呑む。

この幻想郷に存在する実力者は、それこそ強者に満ちている。例えば目の前のスキマ妖怪であつたり、冥界の死を操る亡靈であつたり、紅の館に住む吸血鬼の姉妹であつたり、蓬莱の姫君とその従者であつたり、竹林の炎を操る不死鳥であつたり、山の上の神社を司る二柱の神であつたり。

地底には核熱を操る鴉も一騎当千の鬼もいる。人里には半人半獣の歴史喰らいもいる。人里近くに最近越してきた寺には、毘沙門天の使いと自称する者までいるのだ。

それだけの実力者が並んでいる幻想郷において、八雲紫が言つ『とんでもない輩』。

つまり　それ以上の実力を持つ、博麗大結界の危機となりえる存在、ということ。

「……そいつ、何者よ」

「外の世界で、全てを統べていた王。あらゆる財宝は彼の所有物であらゆる人間は彼の支配にあつた。人は彼を、こう呼んだ」

八雲紫はそこで言葉を切り、苦々しく唇を噛みながら、ゆっくりと告げた。

「英雄王 ギルガメッシュ」

## 02（後書き）

この物語の主人公はギルガメッシュですが、ギルガメッシュ視点にはなりません。基本的には東方キャラの視点になります。

### 03 (前書き)

説明回です。説明長すぎでダレるかも

S.i.d.e 博麗靈夢

紫からそのよひに言われた靈夢にできたのは、精々小首を傾げるくらいのものだった。

「……ギルガメッシュ、って言われてもね。何それ、新種の亀？」

「今は冗談を言つている場合じゃないわ、靈夢」

軽口で流そうとしてみたが、変わらず紫の表情は硬い。靈夢にはただ、溜息をつくことしかできなかつた。

時間も憚らずに人の寝室を訪ねてきて、しかも語り口が「冗長である割に火急の用件だとか、「冗談を言つているのはそっちじゃないのか」と対する言葉は幾つかあつたけれど、呑みこむ。

「はあ……大体、そんな危険な外来人が来たってんなら、あんたがどうにかすればいい話じやない。わざわざ私の所に話を持つてこないでよ」

その代わりに口から出たのは、そんな言葉だった。

八雲紫といつう一種一代の妖怪は、それだけの力を持っている。

有無を言わざず、そのギル亀とやらを自分のスキマに放りこんで、そのまま外の世界へと捨てればいいだけの話だ。紫にとつては、大した苦労でもないだろ？

それなのに、わざわざ『靈夢』の所にまで話を持ってくるといつ行為が理解できない。

「私も……そう思っていたわ」

だが　それに答えたのは、紫の沈痛な面持ちだった。

「ともだちの奴が来た、そう思って、幻想郷の平和を第一に排除しそうとした。私のスキマへと、永遠に封印するつもりだった」  
そう言って、紫は右手の扇子を開く。同時に、くばあ、と空間が裂けるように、彼女の『スキマ』が現れた。

八雲紫の持つ通称、『スキマ妖怪』の語源である　　あらゆる距離、時間、法則を無視する空間、スキマ。

「でも、できなかつた」

最強とさえ、言つていいい能力なのに。

「いえ、違うわね。正確には、ギルガメッシュへとスキマが到達することにはなかつた。私から何度も干渉しても、一定距離へと近付いた時点できの能力が焼き消されるのよ」

スキマが到達することなく、打ち消される。

つまり。

「……結界みたいなもんを張つてるわけ？」

「と、いつよりは常時開放型の能力と言つた方がいいかしら。博麗大結界が、ギルガメッシュに對して何らかの能力を与えたものと思われるの」

「能力、ねえ」

幻想郷に暮らす者は、大なり小なり能力を持つてゐる。靈夢の『主に空を飛ぶ程度の能力』、紫の『境界を操る程度の能力』をはじめとして、その種類は様々だ。中には紅魔館の吸血鬼のように、『ありとあらゆるもの破壊する程度の能力』、『運命を操る程度の能力』などといった物騒なものまである。

まあ、人里に暮らす一般人なんかは、『竈の火がいつでも点けられる程度の能力』、『明日の天氣が分かる程度の能力』、『どこに居ても南が分かる程度の能力』などといった、戦いには一切使えない微妙

すぐれる能力を持ち合わせている場合が多いのだが。

たまにやつてくる外来人は、とんでもない能力を持っていることが多いと聞くが。

「恐らく……いや、間違いないわね。ギルガメッシュの能力は、『王である程度の能力』よ」

「はあ？ 王である程度の能力？」

思わず靈夢は首を傾げる。『あらゆる干渉を打ち消す程度の能力』とかならばまだ分かるが、『王である程度の能力』というのは、あまりにも具体性がない。

しかし、紫の面持ちはふざけているような様子が欠片もない。心底本気で言っているのだろう。靈夢にはどうにも、その『王である程度の能力』の恐ろしさとやらが理解できないのだが。

「ええ……『王である程度の能力』。つまり、その存在そのものが『王』なのよ。王様といつのは、基本的には一番偉いでしょ？」

「うん」

それは、靈夢も否定しない。幻想郷に王といつものは存在しないため、その偉さとやらがいまいち理解できない部分はあるけれど。

靈夢にとつての王といふ存在の認識は、「まあ、偉い人なのよね」程度だ。

「一番偉い人物である王は、その行動を誰にも邪魔されない。つまりこれが能力の拡大解釈結果として、『王であるがゆえにあらゆる干渉を拒絶する』ということが起じているのよ」

「……なるほど。だから紫のスキマが近づけないわけね」

「ええ。私のスキマは、それこそ『干渉』そのものだから」

「でもそれだと……弾幕も効かないことにならない？　あらゆる干渉を拒絶するんなら、攻撃こそまさに最大級の干渉じゃない」

もしも弾幕が効かないとなれば、それこそ最強だ。絶対に勝てない。靈夢はそう考へて、背筋が寒くなる。

「……いえ、恐らく、攻撃は効果があるわ」

「なんどよ？　あらゆる干渉を拒絶するんでしょ？」

「確かにその通りだけれど、それはあくまでも能力の拡大解釈なわけです。例えて言うなら　紅魔館のメイド長は知っているわね？」

「咲夜？　あいつがどうかしたの？」

思いもよらない名前に、思わず靈夢は眉を寄せた。

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜。『時間を操る程度の能力』という反則的な能力を持ち、一流のナイフ投げの腕を持つ。それでいて吸血鬼姉妹に対するメイドとしての奉仕も完璧だと。一家に一人欲しいメイド、と評判である。

「あの子は……年をとらないわ」

「は？ 何言ってんのよ、咲夜は人間よ？」

「『時間を操る程度の能力』を持つといつことは、決して『時間を止める』『時間を動かす』『加速させる』『減速させる』、くらいしかできないわけじゃないわ。『時間』とは人間で言うならば『加齢』、つまり年齢ね。『時間』を操ることができるといつことは、つまり『加齢』も操ることができることができる。これが能力の拡大解釈よ」

「……あんたは眞面目に説明するつもりがあるの？」

さつぱりわからん、とでも言いたげに、肩をすくめる。

紫は呆れたように嘆息して、「つまりね」とまだ説明を続けるつもりらしい。いい加減説明ばかりで飽きてきた、と靈夢は口を尖らせた。

「ギルガメッシュの持つ『王である程度の能力』の拡大解釈として、『あらゆる干渉を拒絶する』という結果を生み出した。けれど、そ

れはあくまでも拡大解釈であつて、能力から産まれた一次的な副産物みたいなものなのよ。ギルガメッシュの本来の能力が『王である程度の能力』である以上、博靈大結界によって定められたスペルカードの攻撃は、『干渉』と認識されない。分かった?』

「……ウン、ワカッタ」

もう疲れたため、そう靈夢は紫に生返事を返す。紫はなんとなく訝しむ目で靈夢を見てきたが、特に何も言つてはこなかつた。

「まあ、今回は別にいいわ。改めて明後日の昼間、博靈神社を使わせてもらひうわよ」

「……なんですよ?」

唐突な話題の変換に、思わず靈夢はそう反応してしまつ。

「なんでつて、分かつてるでしょう? ギルガメッシュの存在は、幻想郷にあつてはならないもの。だけれど、私一人の力じゃ倒せそうにないし、幻想郷の実力者に渡りをつけて、全員でどうにかして倒そう、っていう作戦なんだけど」

「……あいつらが動いてくれるわけ?」

靈夢は、これまでの異変で色々と関わった連中の顔を思い出す。

うん、どいつもこつも我慢放題かつ自分勝手の血口の中だ。とても  
じゃないが、紫を中心とした統率的な行動なんて取れるわけがない。

「……そこは、私がどうにかするわ」

が、紫には勝算があるらしい。

靈夢にはとても思い浮かばなかつたが、その代わりに嘆息を返す。

「まあ、分かったわ。それじゃ明後日の昼間、使いなでこよ。その代わり、お茶は出すけど出涸らしになるし、茶菓子なんて出せないわ。もし欲しいなら、自分で持ってきてなでこ」

「……何か買ってから来る」とにするわ

ふふっ、と紫が笑う。そしてそのまま、唐突に出てきた空中の裂け  
皿、呑まれていった。

## オリジナル宝具解説

『絶対不落の砦』  
アスピス・ヘパイトス

ギリシャ神話に登場する鍛冶の神、ヘパイトスが作り上げた青銅の盾。

『イリアス』においてアキレウスが使用したため、『アキレウスの盾』という名前の方が有名。

真名開放をせずとも、常時一定範囲内に結界が形成される。ただしヘパイトスが作り上げ、アキレウスが使用する『以前』の原典であるがゆえに、本来の『アキレウスの盾』よりもその結界の力は弱い。本物の『アキレウスの盾』は盾自体にアキレウスの不死性が付与されているため、壊れることがない。

宝具解説していなかつたので一応。

## 04 (前書き)

若干グロ注意

タグにR-15を追加しました

## Side ルーミア

圧倒的すぎる力だった。

空中から唐突に現れた数多の聖剣、魔剣の類に、ただひと振りだけで歴史を変えてきたような武器の数々。その全てがルーミアを刺し、貫き、掠め、突き立てた。

ヒュー、ヒュー、とくぐもった声が、喉から漏れる。その体に四肢は既になく、出来の悪い人形のように転がっている。右腕は粉々に千切れ、左腕は皮一枚で辛うじて繋がっており、左右の足は爆ぜて消えた。それでも、ルーミアはまだ死んでいない。

本来ならば一撃で巨人すらも塵殺できるであろう宝具の射出をその身に浴びながらにして、それでもまだ、生きていた。

「ほう、まだ生きておるか雑種」

金色の男がルーミアに近づき、そう薄笑いを浮かべながら言つてくる。

本来ならば、ルーミアは死んでいる。

四肢を失つまでもなく、最初に放たれた宝具の一、二本目で、ルー

ルーミアは既に死んでいただろ。う。

そんなルーミアが生きているのは、ひとえに博麗大結界、スペルカードルールのおかげだった。

枚数の提示といった細かい点については省略したものの、ルーミアは己のスペルカードのみで勝負を行つた。そして博麗大結界は、スペルカードルールで戦う以上はそこに死者を出さない。だからこそ、ルーミアは生かされているだけだ。

「我の財をあれだけその身に受け、未だ生きているとはな。化生といえ、その生命力は評価に値する。褒めてつかわす」

どこまでも傲慢に、男はルーミアにそう告げる。

だけれどルーミアは、そんな男の言葉に、胸が張り裂けるような思いを得た。己が、この王に認められた。それだけで、死を待ち動きを悪くしようとしている心臓が弾んだ。

何故、ヒルミアは思つ。

現在半殺しにされ、そして遠くない未来殺されるであろう相手に、遙かな天空から見下されながらお褒めの言葉をいただく。そんな現状に、ひどく興奮している自分が理解できない。まるで、それが。

嬉しい、みたい」。

「武辺の化生よ、名を聞け。我に名乗ることを許す」<sup>オレ</sup>

「……るー、みあ」

そんな男の言葉にて、ルーミアは喉から声を絞り出して応える。決して男は、ルーミアに強要をしたわけではない。声を出すことすら全身が痛むような現状、名前など答える必要なんて一つもなかつた。だけれど、答えなければならない、やつ思つてしまつた。

「ルーミアか。覚えておくぞ、雑種」

ぐくん、とまた心臓が跳ねる。ルーミアはただ名前を呼ばれただけだといつのに、激しい昂りが心を染めていた。

もっと言葉を聞きたい。もっと近くにてほしい。もっと名前を呼んでほしき。

そう考える反面、違う感情がそれを制止する。

言葉をいただけるなど勿体無い。あまりの気高いところにいたりできない。名前を呼ばれるなどあまりに思れない。

だつて、彼は。

その男は、王であるのだから。

「さて、一体ここは何処だ。英靈の座に帰るものであると考えていたが、受肉をしている存在は英靈の座に戻らぬということか。全く、まさか最後にあのフェイカーが足搔いてくるとは……」

虚空を睨みつけながら、そう呟く男。

その言葉の内容など何一つ分からない。だけれど、ルーミアは思った。この王は、幻想郷の人間ではない。つまり、外来人だ。

ならば。

「待……つ、て」

ルーミアに背を向けようとした男を、そうか細い声で制止する。

小さな声ではあつたが届いたようで、男は足を止め、そのまま首だけでルーミアを振り返った。

「何用だ、雑種。我を呼び止めるとは、不敬であるぞ」

オレ

「……わた、しは、るー、みあ」

「貴様の名は先程聞いたはずだ。いつオレ我が同じ質問をした」

「あなた、の、家臣に、して、くだ、さい」

そこまで言い切つて、じほいじほつと咳き込む。口の中を、金臭い血の味が占める。これが人間のものであるならば甘露なのだが、生憎自分の血に対して美味いと思えるほど、ルーミアは変わっていかつた。

男は、そんなルーミアの言葉に眉を寄せた。

「ふむ。そのような半死人の身で我オレ臣下にあることを望むか。しかし雑種よ、我オレは弱い家臣などいらぬ。貴様を拾つたところで、最早命は保つまい」

「死、にま、せん……」

相変わらず咳き込みながら、ルーミアはその男に告げる。この男が手を貸してくれるならば、ルーミアは即座に回復する自信があった。

だから、ルーミアは懇願する。

「わた、しが、死、なかつた、ら、家臣、に……」

「まう。しかし、その状態からどうのよつて生き返るつもりだ？」我<sup>オレ</sup>  
の持つ治療薬をくれてやつても良いが、それでは賭けになるまい。  
良かう、家臣のおらぬ<sup>オレ</sup>とこうのも張子の虎よ。貴様が見事生き  
のびることができたならば、我が一の家臣としてやう。

「な、ら……」

それを指さそうとして、手がないことに気付いて、思わず苦笑した。  
意識が朦朧としている。早く伝えなければ、手遅れになるかもしれ  
ない。既に四肢を失つて、随分な時間が経っている。下手をすれば、  
このまま死んでしまう羽目にもなりかねない。

だから。

「わた、しの、リボ、ン、を、外……して」

それを、示した。

「リボン？　ふむ、その程度の用事にこの<sup>オレ</sup>を使おうとは、雑種と  
は思えぬほどに面の皮が厚い。しかし、貴様の腕を無くしたのもま  
だ我<sup>オレ</sup>だ。此度は我<sup>オレ</sup>の手を煩わせることを許す」

男が膝を下ろして、ルーミアの頭にある、リボンに触れようとす  
ると同時に、ぱちり、という静電気のような音。

「ふむ」と一言呟き、男が手を引っ込める。

「はず、せ、ない……？」

「巫山戯るな雑種。」<sup>オレ</sup>この我に出来ぬことはない。ふん、まさか封印しかも、これほど強力な呪いの封をされているとは思わなかつただけだ。この程度、我が財をもつてすれば容易く解除できる

そつ男は言つて、何もない空間から、歪な形をした短刀を出した。

全く戦闘には向いていなさそうな、何かの儀式に使われるような、紫色の短刀。男はそれを軽く手先で弄び、そして、ルーニアに向けて。

振り下ろした。

思わず、ルーニアは目を瞑る。その短刀の切つ先は、ルーニアに刺さることなく、ただそのリボンだけを切つた。

どくん　どくん　ルーニアの体に、止めどなく力が溢れ出す。

あふれ出た妖氣は闇となり、その四肢を形作る。肩までしかなかつた髪は腰元まで伸び、そして全体的に幼かつた体が、相應に成長し

てゆく。まるで早回しのように行われるその光景を、男はまるで余興の一つであるかのように、腕を組んで見ていた。

「……ふう」

体を再生し、全身を全盛期の姿に戻したのちに、ルーミアは軽く前髪をかき上げた。

服装は普段と変わりないものの、完全にその身に纏う雰囲気は、ルーミアのそれではなかつた。むしろ、もっとおぞましい何かであると言つていゝ。

「ふむ、なかなか良い余興であつたぞ」

「……こつちは、体の再生に必死だつたんだけビサ。まあ、いいか。お陰様で封印が解けたよ、ありがとう」

「なに、我が臣下のことだ。臣下を氣遣つともぞきぢして、王は名乗れぬ」

男はそう言つて、態度を変えない。大抵、封印される前のルーミアを見た人間は、悲鳴を上げてどこかへ逃げていつてしまつたが。

だから、そんな男の態度は、ルーミアにとつて好感の持てるものだつた。

「では、改めて」

す、ヒルーミアは頭を下げて、片膝をつく。

それは、騎士が王に忠誠を誓う所作。

「我が名はルーミア。王、あなたに忠誠を誓います」

「ルーミア、貴様の忠誠を受け入れよう。我が名はギルガメッシュ。  
貴様の王となる者だ」

そうして幻想郷に、一組の主従が誕生した。

カリスマA+の本領發揮のギル様です。呪いの類のようなカリスマということで、『特に理由はないけど忠誠を誓う』みたいなことが頻繁に起るのでないかと考えてルーニアを臣下に入れちゃいました。

### EXルーニアについて。

作者の捏造です。だけどルーニアって実はほんと強いと思う。闇を操るわけだし。

それからEXルーニアがよく持っている剣ですが、あれについても勿論あります。勿論宝具です。もう少ししたら出ると思います。

「是非このキャラを臣下に加えてくれ!」ってユーリクエストがありましたらどうぞ。よほど無理なキャラじゃない限りはリクエストでお答えします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2307ba/>

---

幻想郷征服録

2012年1月8日22時49分発行